

ごうちゃんひろば

知ろう 好きになろう 東十郷

次の10年へ



戦後80年 『戦争を身近に知る』

- 戦争体験の話
- 紙芝居「いくさの少年期」

明日 十四日
大坂をくうしゆうします
このばくげきがさいごで
あります
一九四五年
U. S. A.

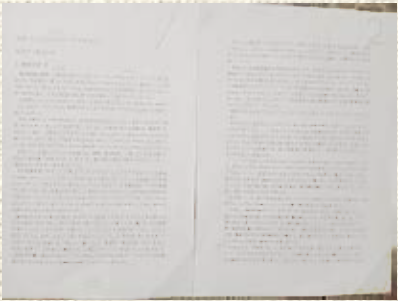




8/2「戦後80年 戦争を身近に知る」を開催 戦争を体験された10名の方の話を代読、その原稿です ※発表順

辛い記憶が刻まれた言葉を、そして言葉からのメッセージを受け止めてください

※お寄せいただいた原稿
※お父様の学様が
残されていた原稿



丸岡駅



敦賀駅



初年兵

一日の中に初年兵の事故等があったら容易に就寝はできない。初年兵集合の命令で、班内の上等兵の説教が始まり、最後に全員の連帯責任として対抗ビンタが始まるのである。タイカクと称するズボンのバンドを持って集まり相対して正面を向き、タイカクを回し顔をたたく。又はジョウカ（上靴、スリッパ）を持ってお互いに叩く。スリッパの底の鉄で血の出る場合もある。翌日顔が腫れ上がり、歯も抜けて、口が痛く、飯も十分食べられない時もあった。

便所に行く時は「第〇班〇〇、廁に行つて参ります。」と記帳して入り、用が済めば「第〇班〇〇、帰ります。」と退出時間を記入して出ていくが、ある夜、大変な事件がおこった。逃亡が推定される兵隊が出たのである。結局鉄条網に足が引っかかり、血が雪に落ちた足跡から居場所が発覚した。当然、逃亡罪が成立し、重営倉入りと聞いた。

厳寒の日が続いた。雪中の教練で軍服が濡れて染み通り、寒気がするが、体温で乾かす以外になかった。古年兵はストープの赤々と燃える周りに立っている。軍隊では一日の差が苦楽の境界になった。

02

軍隊生活

坂井町 伊藤 敏幸様（原稿は父の学様）

徴兵検査の結果、合格者は続々と入営していった。自分も昭和二十年一月五日入営と決まった。入営者は、郷土のお宮に最後の別れの挨拶をするともに、集落の人々の前で挨拶して郷土と別れるのである。前夜は村の人たちが家を訪れ祝ってくれたが、夜中眠気も覚め、一夜が明けてしまった。

丸岡駅よりたくさんのお見送り人と別れ、日の丸の旗に送られた。敦賀市内の旅館に一泊、父もついてきてくれた。翌日入隊した。軍服（古い洗濯されたもの）を支給され、軍靴、巻き脚絆、小銃（三八式歩兵銃）にいたるまで番号順に支給された。

01

戦災孤児の悲しみ

坂井町 若松 静栄様

戦後80年、戦争孤児である私のいとこの姉弟2人も老齢で最近亡くなりました。2人の父（私の叔父）は海軍大尉でサイパンで戦死、母は東十郷小学校の代用教員をしていましたが、心労と病気でまもなく亡くなりました。

孤児となった3歳と2歳の姉弟は、父と母それぞれの実家に引き取られることになりました。姉のM子は父の実家である私の家に、弟のH男は、母の実家である兵庫でと姉弟が別れて育てられました。

私は姉と二人姉妹だったので、私たちは三人姉妹として育ちました。昨年M姉が亡くなるまで、本当の姉妹として睦まじく交流していました。弟のH男も辛いことがたくさんあったと思いますが、立派に会社を立ち上げ、今は息子が引き継いでいます。

M姉が中学生ぐらいだったと思います。お盆に親戚中が集まった時、亡き叔父の戦地からの最後の手紙（自分の髪と爪、我が子のM子とH男への熱い思いの手紙）を皆で感慨深く見ていた時、ある叔母さんが「Mちゃんもこつちへおいで」と声をかけましたが、M姉は、「そんなもの見たくもない」と言って傍へも寄ってきませんでした。

3歳で両親を亡くし、姉弟が離ればなれに育てられた寂しく辛い思いは、誰にも理解してもらえなかったのだと思います。お父さんは、海軍で偉かったかもしれないけど、唯々生きていてほしかったという思いだったのでしょ。

M姉やH兄のような寂しい人生を送る者がいない世の中を、平和な世を守っていく責任が私たちにはあると思います。



叔父たちの墓
サイパン戦死
沖縄戦死とあり



戦死した叔父



戦後 姉弟は、別々の家で離れて育つことに…

03

戦争体験とすること

坂井町 三津屋トシ工様

今年は昭和一〇〇年。私は昭和十年生まれで九十歳です。富山市生まれです。ですから戦争体験者でもあります。

思い出しますと子供ではありませんが両親がいろいろご苦労なさったこと今も頭にあります。私達もがまん、がまん教えられました。ごはんには大根、いも、菜っ葉が入ったもの。おつゆにはサツマイモのつる。教科書はわら半紙をホッチキスでとめたもの。トイレトペーパーはふきの葉を利用したこともありました。節約、節約の生活でした。

そうしているうちにラジオより臨時ニュースが入りました。太平洋戦争の開戦でした。だんだん戦が進み空襲警報が毎日のようになりました。北陸も危ないと父が理解して福井県竹田村へ疎開しました。（母と子供）私は竹田村竹田小学校へ転校しました。最初はさみしい思いをしました。私たちは安全な所にいますが富山のお家の事を心配していました。

七月十二日敦賀、今度は武生が金沢かと思っていた所、八月二日富山が爆撃をうけ実家の祖父が防空壕で焼死しました。どんなに辛かった、苦しかった事だろうと思いました。

八月十五日ラジオの前でニュースを聞くようにと言われました。日本が敗戦したとのニュースでした。女の方は泣いておられました。竹田村の方にはいろいろお世話になりました。感謝、感謝でいっぱいでした。私は余生僅かですが、日本はじめ世界全体が平和であることを念じています。



戦時下の食事
（だいこん、いも、はっぱ、
さつまいものつる）



旧竹田小学校 ※現在はちくちくぼんぼんに



8/2 富山大空襲
B29が174機 犠牲者 約3,000人 ※地方都市では最大

06

福井空襲

福井市 酒井 悦子 様

戦後80年、戦争体験者の一人として私なりの記憶をたどりつつ、戦争を知らないこれからの世代に微力ながらお役にたてたら幸いかと思います。

日本は昭和16年12月8日の真珠湾攻撃から戦争に突入し、昭和20年8月15日の終戦までの足掛け5年ほどの間に、約300万人ほどの犠牲者を出したともいわれています。

当時、私は福井県立高等女学校1年生（今の中学1年生）。子ども心にも、日本の未来はどうなっていくのだろうと不安を感じていたのを覚えております。

さて、戦局も厳しくなってきた昭和20年7月19日の夜、米軍の爆撃機 B29 の編隊何十数機が襲来、一夜にして福井の街は全滅し、焼野原となる大空襲を受けました。空襲のあった夜、無数の焼夷弾が投下され、夜でも空の爆撃機がはっきり見えるほど明るくなり、次々と激しい音とともに「ピューン」「ピューン」「ピューン」「ドカン」「ドカン」空から石でも落ちてくるように、すごい音とともに焼夷弾が落とされました。その線下の中を大勢の人々が逃げさまよう様子は、今思いだしても生き地獄そのものでした。

その後、焼野原となった福井の町から人々の姿は消えました。勉強する学校もなく、靴のかわりにスコップを持ち、学校や焼け跡の整理が毎日続き、ようやくプレハブ校舎での授業も始まりましたが、今までの軍国主義教育から民主主義教育に変わり、また、男女共学の制度に tous べてが一変しました。しかし、人々は復興に向かって前向きに進んでいったのです。

戦後80年、命がけで国を守っていただいたご先祖様に感謝をするとともに、二度と戦争は繰り返してはならないという気持ちで一杯です。



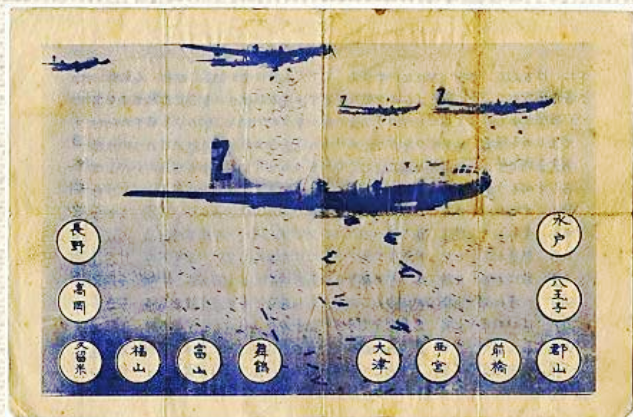
福井空襲のあとの学校



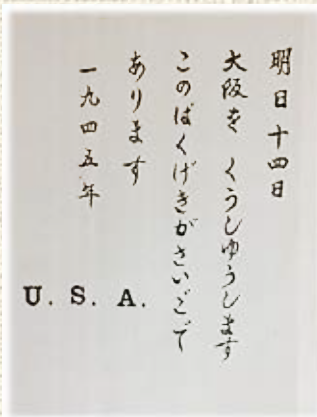
福井空襲 米軍爆撃機B29 127機 焼夷弾9500発 81分間



新しい教育へ



米軍によるビラ投下



8/13 大阪上空より投下された米軍の爆撃予告ビラ

04

戦地からの便り

永平寺町 酒井 景子 様

「男、達者で勉強していますか？ お父さんも達者で働いているから安心して下さい。」

内地では桜が咲いてもう散つてしまつたでしょうね。満州も大分と暖かくなつてきました。

この間、お父さんは、七道溝^{ななどうこう}という鉄になる石を掘り出す山を見てきましたから、この話をしましょう。

鉄は学校でも教わっているとおり、アメリカやイギリスを撃つためになくなくてはならないものです。軍艦も戦車も大砲も鉄砲の弾も、みんな鉄から造られます。

七道溝という鉄の山は東山と西山と大きな山が二つあって、山の中腹に向かつて、いくつもの大きな穴があいています。その穴には二本のトロッコ線が通つていて、中で掘つた鉄鉱石を運んで走っています。穴の中には事務室もあります。

岩を掘つた穴を、ずんずん奥へ進んでいくと、削岩機^{さくがんき}で鉄の石を砕いて掘り出しています。時々火薬で岩を砕かせる音が、ズシン、ズシンとなつて、そのたびに物凄い地響きを立てます。掘り出しているところは、それはそれは、ひどい石の粉になつたほりです。そこで満州人が一生懸命仕事をしています。特に大仕掛けで掘り出すところを『ハライ』といって、本当にものすごいものです。そのため、にけがをするものや、死んだりする者があるくらいです。鉄というものは、こうして、人の命を懸けて掘り出される尊い^{たとい}ものです。

帰りにお父さんは七道溝から掘り出された、磁鉄鉱、赤鉄鉱、炭酸鉄などの石を七つほどもらつて帰りました。今度家へ帰るときに持つて帰つて見せましょう。さようなら

四月二十四日 父より
(東鉄道開発会社の便せん)



鉄鉱石採掘



満州国の鉄道



満鉄本社 大連

05

昭和二十年八月十三日
米軍投下のビラ

坂井町 西郡 正義 様 所蔵

日本の皆様

私どもは本日皆様に爆弾を投下するために来たではありません。お国の政府が申し込んだ降伏条件をアメリカ、イギリス、志那並びにソビエト連邦を代表してアメリカ政府が送り出した回答を皆様に知らせするためにこのビラを投下します。戦争を直ちにやめるかどうかは、かつてお国の政府にあります。皆様は次の二通の公式通告をお読みになれば、どうすれば戦争をやめる事が出来るかがお判りになります。

日本の皆様

私どもは本日皆様に爆弾を投下するために来たではありません。お国の政府が申し込んだ降伏条件をアメリカ、イギリス、志那並びにソビエト連邦を代表してアメリカ政府が送り出した回答を皆様に知らせするためにこのビラを投下します。戦争を直ちにやめるかどうかは、かつてお国の政府にあります。皆様は次の二通の公式通告をお読みになれば、どうすれば戦争をやめる事が出来るかがお判りになります。

8/13 米軍投下ビラ

07

私にとっての戦争

坂井市 匿名希望

私は、昭和16年生まれですので、年齢的に最後の戦争体験者と思われます。今の芦原中学校あたりに、芦原飛行場が完成し日本の軍隊が飛び立ったことを聞いています。昭和20年2月ごろに、日本兵の乗った戦闘機がアメリカ軍によって撃墜され、私たちの住む海岸に落とされました。戦死した軍人を地区の住民たちが、私の住む寺の本堂に安置しました。私はその兵隊さんの額に手をのせ、冷たかったことを80年たった今でも忘れられず、たまにその兵隊さんの夢を見ます。

戦時中は食べ物がなく、今でいうすいとんとさつまいもばかり食べていました。当時、小学校は国民学校といい、学童は少国民と呼ばれていたそうです。小学生時代の友人は、8月14日に防空壕を掘ったところ、15日に終戦になったと言っていました。

日本は敗戦により、アメリカのマッカーサー元帥の判断で、女性の参政権、教育改革、農地改革が行われ、福井県では、戦後初めて女性国会議員の今井はつさんが当選しました。昭和26年4月12日、マッカーサー元帥が任務を終え、帰国の日。早朝帰国の模様をNHKはニュースの時間を変更して放送し、マッカーサー元帥の「さようなら、さようなら」という場面を今でもはっきりと覚えています。

これは母から聞いた話ですが、母は区の婦人会長を長らくしていたので、戦時中招集令状が来た民間人を見送るため、国鉄芦原駅へたびたび生き見送ったことを今でも心が痛むと言っていました。私の長兄は、昭和19年に志願して兵役につき、旧満州に送られ17歳の若さで戦死しています。310万人以上の人が戦争の犠牲になった。戦争はもうこりごりです。



あわら 三國飛行場跡(三国池上)



8/14 防空壕を掘り 次の日 終戦



26年4月12日

09

北朝鮮での生活

坂井町 山本 秀勝 様

二歳の時、福井に祖父をおいて、教育関係の仕事で出稼ぎに行く父と一緒に朝鮮半島に行く。母、姉と自分の四人で、丸岡駅から下関まで列車で行き、それから船でプサンへ。プサンから列車でソウルへ。三八度線を越えてピョンヤンへ、そして、より北方に数キロ離れた平安南道趙雲の日本人宿舎まで歩いて、やっと到着した。

宿舎の横に学校があり、校庭で毎朝、朝礼をし、生徒の学習の一日が終わる。周りの風景は、低い山に囲まれ、森林と小高い岩があり、民家が点在している。宿舎の前は桑畑だけだった。数年が経過した。途中、シンガポールが陥落し、日本軍の勝利でテニスボールが配られた。冬はオンドルが敷かれ暖かかった。お手伝いさんが骨付き肉を準備してくれた。また、土の中の朝鮮漬物を掘り出して食べさせてくれた思い出がある。お手伝いさんに背負われて北朝鮮の北西部を流れる大同河という大きな川まで行ったことがあった。

突然、お手伝いさんから、ロシア軍が侵入し、日本人が危ないのですぐに退去するようにとの連絡があり、父を残して全員帰国する。昭和十七年ごろだったと思う。福井に帰国、戦中に入り、福井空襲を経験した。

昭和二十年八月、終戦を迎えた。天皇の終戦の言葉を前の家の広場でひざまづいてラジオで聞いた。大戦が終わったと感じた。

二年後、父がボツンと帰ってきた。

私は七才で無事、東十郷小学校に入学、十郷中学校と進み、現在に至った。



北朝鮮 平安南道 日本統治時代



平安南道 日本統治時代



シンガポール陥落祝賀大会

08

福井空襲と父の終戦

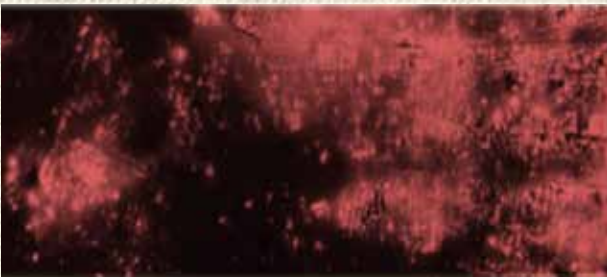
坂井市 大橋三和子 様

●7月19日夜、空襲警報がなり起こされて防空頭巾を被って避難の準備をした。玄関の上り框では母が風呂敷に位牌をくるくると巻き、私の背中にたすきがけて背負わせた。兄にも仏壇から何か巻物を取り出して風呂敷で巻き、同様に背中に背負わせた。弟と3人で家を出た。母は身体が弱く上り框に座っていた。外に出ると大勢の人が歩いていて、暗さや怖さは感じなかった。また大きなトタンが2、3枚爆風で舞ってカラカラと音をたてて地面におちてきた。山に着くと所々に防空壕があり、中には沢山の人達が座っていた。3人が入ろうとすると、入り口で大人の人から止められて中に入れてもらえなかった。仕方なく山外れの崖の所で西の方を見ると空は一面真っ赤に染まっていてその下が燃えているのが見えた。「福井市が燃えているぞー」「B29爆撃機が焼夷弾を落とした」と大人の人たちは言っていた。やがて警報は解除になり家に帰った。翌朝には父の従兄弟の家族6人が、着の身着のままで福井市から疎開して来た。

●父は終戦と知り、すぐ山の中に逃げ込んだ。山の中には沢山の人たちが歩いていた。引き揚げ船に乗るため中国へ向かうときに言われた。「絶対に走ってはいけない、走るとソ連軍が国境の崖の上から鉄砲で打ってくるから。」その為2km位の真っ直ぐな道を「南無大師遍照金剛」と唱えながら歩いた。崖の上からはソ連軍が時々威嚇射撃をしてきたが、無事に通過する事ができた。ようやく引き揚げ船が出る中国の青島に着いたが、人でいっぱいだった。乗船の順番がいつになるか分からなかったので、中国人の豆腐屋で豆腐を分けて貰い町中に豆腐を売って歩いた。翌年(昭和21年7月頃)やっと順番が来て引き揚げ船に乗船できた。日本の島が見えると全員が一斉に万歳三唱をして喜びあった。無事、舞鶴の引き揚げ港に上陸できた。家では終戦後何の連絡もなく心配していたが、朝、無事の電報が来て母はかまどの前でご飯を炊きながら泣いていた。



山の防空壕



遠くから見た福井空襲の火



舞鶴港に着いた引き揚げ船

11

満州を経て今100歳

坂井町 森瀬 ちかを 様

100歳の老婆です。

月日はだいぶん過ぎ去りましたが、思い切ってペンを持ってみました。現在は、デイサービスでお世話になっています。骨折して歩くのが少し不自由しています。人生最後の苦労話を聞いていただきたく、したためました。

昭和15、6年頃は、日本もまだ平和だったと思います。当時の外務大臣は、松岡様だったと記憶していますが、海外発展を奨励していた時代でした。私は、満州在住の叔父を尋ねて16歳で渡満しました。運よく満鉄KKに入社でき、楽しい生活を送っていました。

19年に一度内地に帰り、再度満州に行くときは、日本も大分状況が悪くなっていたので、家族のものは大反対でした。聞く耳を持たず、無理して渡ってみたところびっくりでした。職場はロシア人が入り、滅茶苦茶でした。できる限りのお金を集め、身につけ、社宅に逃げましたが、社宅もすでにロシア人が入り、散乱していました。厳しい大陸の冬を迎えるので、暖かそうな服を身にまとい、満鉄の現場小屋に逃げました。お金は、社宅の庭の木の元に埋めました。小屋には5、6人の同胞がいて、助けを求めました。一番ねらわれやすい小娘なので、早速変身しました。大和撫子に恥じぬよう、万が一の場合は自滅と、手榴弾、青酸カリを身につけ、頭は丸坊主に、顔は炭で黒く塗り、服はボロボロに切りました。男の人に頼んで、仮の夫婦として、昼は隠れ家、夜は男の方々と外で過ごしました。

一番苦労したのは食べ物で、塩たらと水だけで過ごしました。引き上げ船でようやく帰れました。

戦後80年、尊い若者の命をいただいて今の幸せがあります。感謝の気持ちでいっぱいです。

ご来場された方々の感想紹介(一部)

本日は、私の知らない戦争体験も知り、皆さまの苦労がよくわかり、出席できたことをうれしく思いました。体の不自由な私を連れてきてくれた息子にも感謝です。(車椅子でご来場された女性)

平和な時代に生まれて本当に幸せだった。数人の方が涙を拭いているのを見て辛かった。今の子どもたちに語り継いでほしいと思った。

冒頭の挨拶でもあったが、体験者の思いや状況を朗読と言う形で聞くことで、遠い話ではない気がした。年配の方が多かったが、若い世代にも伝えたいと思った。ケーブルやYouTube等で閲覧できるようにしたり、義務教育では、作文などの選択課題にしたりできないかと思う。

紙芝居が素晴らしかった。戦中、戦後の人たちの生の声を聞いて心がゆさぶられた。よい会だった。

今日はありがとうございました。野戦病院で看護していた母も、昨年102歳で他界しました。子どもの頃から聞いていた内容が重複し、身近な一市民や子どもたちの体験のすさまじさを感じました。改めて日々ありがたく、感謝です。

辛い思いを抱えて長く苦しまれてきた方の思いが痛いほど伝わってきた。多くの人に聞いていただきたい。この取り組みをネットでも紹介し、平和が続くことを願う。自分も伝えていく活動をさやかにでも続けていきたい。大変良い企画をありがとうございました。紙芝居「いくさの少年期」が何とも心に響いた。

戦争当時の様子が生々しく胸にせまってきました。8月になると、実家で亡き父が語っていたことを思い出します。戦争のない平和な世界、強く望みます。

10

幼き日と戦争

坂井町 堂越 繁規 様

私が生まれた年に、太平洋戦争が始まりました。戦争が大変なこととは思いますが、何も知らない四、五歳の時です。話には聞いていますが、実感がわかない。

覚えてるのは、家の廊下に、生活用品を全部並べて、いつでも外に出せるような備えをしていました。私たち兄弟二人を乳母車に乗せ、いつでも逃げ出せるようにと、母は気をつかってくれていました。夜になると、裸電球に黒い布をかぶせて、光が漏れないよう気をつかって食事をしていました。

昭和二十年七月一九日に福井空襲がありました。私の前庭へも、南風に乗って、「羽織り」が舞い落ちてきたのを、子どもながらに覚えています。福井空襲では、十万発以上の焼夷弾が、空が真っ赤になるくらい降り注ぎ、中心部ほとんどが焼きつくされました。福井城のお堀の中へ、たくさんの方が飛び込んだと聞いています。福井のあと、富山の空襲は、私の家から真北に紅い光が見えました。

私の集落からも、戦争で亡くなった人のいる家の戸数、五十一戸、十四名の戦死者が出ています。一家で三人の兄弟をなくした家族もあります。ある家の遺言状を見せてもらったことがあります。「お父さん、お母さん、先立つ不孝をお許しください」から始まり、とても涙なしでは読めませんでした。二十歳ぐらいの青年が、戦争の犠牲となって亡くなっています。私の集落の入り口に、慰霊碑があります。昭和四十四年の土地改良の時に、戦死した息子や親のために絶対忘れないようにしてほしいと、熱心に建立を熱望しました。

今は時代が変わり、孫やひ孫の時代となりましたが、先人が残した慰霊碑は、我々残されたものが引き継ぐべきであると思います。日本は、礎は、先人たちの尊い命の上に立っている。今さえよければよいなどの考えを、もう一度考え直してほしい。

世界中で戦争がやみませんが、小さな地球上で、大きな宇宙のことを考える人がたくさん生まれてほしいと思います。



電球に黒布をかぶせた



一家で3人の兄弟を亡くされた家の碑も並ぶ



集落の14名の戦死者が弔われている

集落の入り口に並ぶ慰霊碑

いくさの少年期 ~ぼくが子どものころ戦争があった~

1941年~1945年(太平洋戦争)ではなし

小学生、中学生の皆さん、ぜひ読んでください

この話は、福井市生まれの田中幹夫さんが、太平洋戦争があった小学3年生から中学1年生までの**本当の話**です。

ぜひ、**スマホで、ナレーション入りの動画**もみてください。

ARマークの入った**右のイラスト**を無料のアプリ『COCOAR』で読み込んでください。
「いくさの少年期」の動画が流れ、音声がかかります。

■ iOS
AppStoreで
「COCOAR」と検索。
もしくは右記QRから。

■ AndroidOS
Google Playで
「COCOAR」と検索。
もしくは右記QRから。

Start 昭和16年(1941年)12月8日



①「太平洋戦争が始まった」放送が流れる



②友達から聞いて3年生の僕はおどろく



③校長先生が皆で敵と戦おうと言う



⑨校庭はイモ畑や防空壕に 遊び場なし



⑧書初めて「東洋平和」と信じて書く



⑦街中に勇ましい言葉があふれる



⑥金属供出 僕のおもちゃもお寺の鐘も



⑤シンガポール陥落の祝い 先頭がぼく



④米英はなぜ日本の敵なのか質問する



⑩町内会では防空頭巾でバケツリレー



⑪叔父さんに赤紙 かあさんは千人針を



⑫6年の担任の長谷川先生の教え



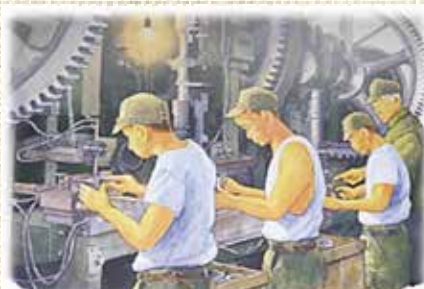
⑬足の悪い一人のためにみんなでゴール



⑭軍人さんににらまれた



⑮廊下に正座 長谷川先生は叱られた



⑫生徒動員で武器作り 勉強しなかった



⑳軍事教練 2、3年生は本物の銃で戦車と走る



⑲「作業」の授業 校庭全部イモ畑に



⑮福井中学進学 下駄で行進して登校



⑰先生が見えなくなるまで手を振った



⑯先生に赤紙が来て、その日でお別れに



㉒沖縄では中学生や女学生が戦死



㉓建物強制疎開で僕の家が壊された



㉔7/19福井空襲 焼夷弾の中を走った



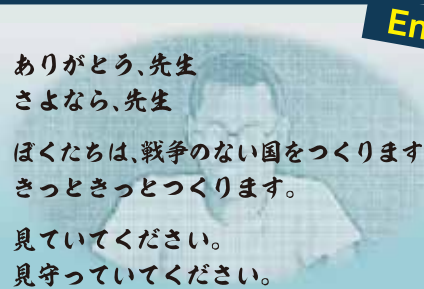
㉕「消火に戻れ」と警官に止められた



㉖街じゅう大爆発 炎を逃れ父の後を



㉗父の指示のおかげで町内全員無事



ありがとう、先生
さよなら、先生
ぼくたちは、戦争のない国をつくります。
きっときっとつくります。
見ていてください。
見守っていてください。



㉘長谷川先生がビルマで戦死したと知った



㉙アメリカ軍がガムやチョコレートをくれた



㉚教科書は間違いだとして墨で塗りつぶす



㉛終戦を告げる玉音放送が流れた



㉜広島 長崎に原子爆弾が落とされた